

万葉集を礎にした地域づくり いにしえ 古の文化遺産を後世につなぐ



たかはし まさき
高橋 正樹

たかおか
高岡市長(富山県)



きくち けんじろう
菊地 健次郎

たがじょう
多賀城市長(宮城県)



多賀城市
高岡市
東近江市
奈良市



なかがわ
仲川 げん

なら
奈良市長(奈良県)



おぐら まさきよ
小椋 正清

ひがしおうみ
東近江市長(滋賀県)

司会・コーディネーター

ささき ひとみ
佐々木 瞳

フリーアナウンサー

現存するわが国最古の歌集である「万葉集」。元号(令和)の典拠として使われた初めての国書となり、注目を集めています。全国には奈良時代の歌人で、万葉集の編纂にも関与したといわれる大伴家持の赴任地など、万葉集にゆかりのある地域も多く、平成28年からはそうした万葉ゆかりの自治体が集う「全国万葉故地サミット」も開催されています。また、今後は観光や文化(教育)振興への活用、後世への継承に向けた取り組みなど、万葉集を軸にした地域づくりがこれまでに以上に活発に展開されることも予想されています。

座談会では、菊地・多賀城市長、高橋・高岡市長、小椋・東近江市長、仲川・奈良市長にお集まりいただき、万葉集を生かしたまちづくりの内容、歴史的資源の継承や市民への浸透の重要性、ゆかりの都市同士の連携策などについて、幅広くお話しいただきます。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



多賀城が創建されて、
あと5年で1300年。
南門の復元などを進め、
令和6年には「1300年祭」を
開催します。

菊地 健次郎
多賀城市長(宮城県)

万葉集ゆかりの地域特性を生かして

佐々木 今年の5月1日、平成に代わる新しい元号「令和」が施行されました。漢籍ではなく、初の日本古典からの引用ということで、出典となった万葉集も大いに話題となりました。

それでは、各都市は万葉集とどのような関わりがあるのか、そして、その地域特性を生かして、どのような取り組みを進めてこられたのか

について、お話しいただきたいと思えます。

菊地 多賀城は、奈良・平安時代に陸奥国の国府が置かれたところで、古代東北の政治・経済・文化の中心地でした。そうした背景から、多賀城市は長らく「史都」と呼び習わされてきました。私が、私は司馬遼太郎さんが『街道をゆく』の中で、「多賀城そのものが詩である」と記述していることにヒントを得て、「詩都」という呼称も意識的に用いてきました。1300年の歴史の重みを感じながら、風雅なイメージを大切にしながら、多賀城は、陸奥国府に赴任した官人たちが、周辺の美しい風景に感激し、多くの和歌を詠んだこともあり、「歌枕の地」として、古来より都人の憧れを集めてきたことが知られています。

今でも、市内には、「壺碑」(多賀城碑)をはじめ、著名な歌枕が残ります。中でもこの「壺碑」、そして「末の松山」(興井)は松尾芭蕉の『奥の細道』に書き留められた風景地として、平成26年にはいずれも国の名勝に指定されました。こうした歴史的資源を持つ多賀城市では、毎年秋に「史都多賀城万葉まつり」を開催しており、大勢の市民の参加の下、万葉衣装時代行列、和歌朗詠など、さまざまな催しが行われています。

高橋 万葉集の代表的な歌人であり、編者であったともいわれる大伴家持は越中国守として5年間、高岡(越中)で過ごしました。

万葉集に残された歌は全部で4516首に上りますが、家持が作った歌は473首。そのうち、220首余りが高岡に赴任した期間に詠まれています。さらに、家持の部下たちが詠んだ歌や、この地に伝わる歌などを加えると、337首にも及びます。私たちはこれを「越中

万葉」と称し、約30年前から「万葉のふるさとづくり」を官民挙げて展開してきました。

その拠点施設として、平成2年に開設したのが、高岡市万葉歴史館です。全国初の万葉集をテーマに据えた専門施設で、万葉集に関する研究と情報の収集・発信などを行うとともに、全国の研究者や万葉愛好家の研究・交流の場としても活用してきました。

一方、万葉集に関する代表的な行事として「高岡万葉まつり」を毎年開催しています。この行事の中でも特に注目されるのが、古城公園の濠に設けられた特設水上舞台で、三昼夜かけて行われる「万葉集全二十巻朗唱の会」というメイイベントです。万葉集全20巻4516首を、2千人を超える参加者がリレー方式で歌い継ぐというもので、今では高岡市の恒例行事になっ



神亀元年(724年)に創建され、陸奥国府と鎮守府が置かれたとされる「多賀城跡」(多賀城市)

万葉ゆかりの自治体が集まって、意見交換をしたらどうか。そのような思いから、「全国万葉故地サミット」を始めました。



高橋 正樹
高岡市長(富山県)

ています。

小椋 「あかねさす 紫野行き 標野行き 野守
は見ずや 君が袖振る」(額田王)

「紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻
ゆゑに 我れ恋ひめやも」(大海人皇子)

これは、万葉集の中でも特に人気がある、大海人皇子と額田王との間で交わされた相聞歌です。東近江市市辺地区の船岡山に万葉歌碑が建てられています。この一帯が相聞歌が交わさ

れた蒲生野の舞台であったと考えられています。また、東近江市は万葉歌人・山部赤人のゆかりの地でもあります。市内にある赤人寺は、山部赤人による創建と伝えられていることに加え、隣接する山部神社も山部赤人が祭神となっています。

このように万葉とゆかりが深い東近江市ですが、現在でも万葉集は市民にとって身近な存在です。相聞歌にも歌われている「ムラサキ」は、市の花に選定されていることに加え、市内には多数の歌碑があり、万葉ゆかりの場所を巡る観光ツアーも行われています。また、万葉集に関連したイベントも多く、市辺地区まちづくり協議会が主催する形で、「蒲生野万葉短歌会」が行われているほか、今年はこの相聞歌が詠み込まれて1350年という節目を迎えたこともあり、この3月には「東近江ムラサキ1350周年記念イベント」も開催しました。

仲川 万葉集が詠まれた万葉の時代とは、どんな時代だったのでしょうか。決して安穏な時代ではありませんでした。飢饉があり、政争があり、何よりも国際情勢が緊迫した時代でした。そのような中でも、国力を結集し、10年足らずである大規模な大仏(東大寺盧舎那仏像)を建立しました。

また、危機が間近に迫っても、内に閉じこめるのではなく、朝鮮や中国、さらにはインドやペルシャから渡来した人たちも積極的に受け入れた、国際性豊かな時代でもありました。さまざまな問題が山積しているながら、元号の令和の典拠となった序文や歌のように、明るい雰囲気醸成されていたことも見逃せません。このような万葉人の姿勢や価値観は、現在においても



特設水上舞台上で、三昼夜かけて行われる「万葉集全二十巻朗唱の会」(高岡市)

学ぶべきものが多いのではないのでしょうか。

平成28年には、国家プロジェクトとして、東アジア文化都市事業が行われました。日本からは奈良市、中国からは寧波市、韓国からは済州特別自治道が参加し、それぞれの都市が現代美術をはじめ、さまざまなプログラムを展開しました。芸術を通して若者たちのつながりが促進されるなど、万葉の時代の価値観を再確認する機会となったのではないかと考えています。

また、平成23年から奈良の芸術、文化、歴史の魅力をも市民オペラを通じて探求、発信する「万葉オペラ・ラボ事業」も展開しており、多くの市民が参画しています。

歴史的資源を現在に生かす

佐々木 万葉集が詠まれた奈良時代から継承さ

れ、地域に根ざした文化は、それぞれの都市における大事な資源だと思えます。地域経営の観点から、どのように地域振興につなげているのか、お聞かせいただきたいと思えます。

小椋 現在、東近江市では、歴史的資源を生かした新しい動きが出ています。相聞歌にも歌われ、市の花に選定している「ムラサキ」の6次産業化への取り組みです。相聞歌にすつかりのめりこんだ若者が会社を立ち上げ、かつて染料として活用されていた「紫根」と呼ばれるムラサキの根を用いたオーガニックコスメの開発に見事成功しました。昨年からは販売を始めたところですが、美容効果など期待されることが話題となり、早速、海外から引き合いが来るほどに注目されています。

高橋 何か特産品を開発する際でも、地域の歴



近江鉄道八日市駅の正面に設けられた、万葉集の相聞歌のレリーフ(東近江市)

史や伝統に根拠を求めると説得力が出ますよね。例えば、高岡を代表する「とこなつ」という名前の銘菓も、「立山に 降り置ける雪を 常夏とこ夏に見れども飽かず 神からならし」という大伴家持の和歌にちなんでいます。

今後は、奈良時代の料理を参考に、名物となる特産品をつくりたいですね。当時、お菓子のようなものも食べられていたようですから、それを復元してみるのも面白いかなと思います。

地域の歴史は、
どれだけのお金をかけても
創れるものではない。
そこにこそ、歴史の奥深さがあるのだと思います。



小椋 正清
東近江市長(滋賀県)

菊地 多賀城市でも、「古代米」を使った新しいグルメブランド『しろのむらさき』の開発、普及に取り組んでいます。また、昨年、市内の東北歴史博物館にて、特別展「東大寺と東北―復興を支えた人々の祈り―」が開催された際には、これを記念して、多賀城や近隣の食材を使い、官民が連携して、メニューを考えた「みちのく多賀城『黄金がねの食彩弁当』」がJR仙台駅などで売り出され、好評を博しました。

仲川 伝統野菜といえば京野菜が有名ですが、奈良にも「大和野菜」という伝統野菜があります。大規模生産や流通に向かないため、自家用としてほそぼそと栽培されてきた野菜ですが、近年は大和野菜をメインに提供するレストランが市内で営業するようになるなど、注目され始めています。

こうした食や文化芸術にしてもそうですが、われわれがこれらを取り上げるに当たって、大きな意味を持つてくるのが、バックボーンとしての地域の「歴史」です。足元に蓄積している、1300年の歴史とうまく関連付けることで、それぞれの価値はより高まります。

小椋 歴史や文化は、どれだけのお金をかけても、簡単に創れるものではありません。そこにこそ、歴史の奥深さがあるのだと思えます。そのような地域に根ざした歴史、文化、伝統を受け止め、さらに磨きを掛け、後世に伝えていく。それこそが私たち市長に求められていることだと思います。

市民への周知にも尽力

佐々木 万葉集をはじめとした、歴史的資源を活用するためにも、市民への周知も重要だと思

蓄積された歴史的
資源をどう生かして、
未来を創っていくか。
これは今の時代を生きる
私たちの責任です。



仲川 げん
奈良市長(奈良県)

います。
菊地 先ほどご紹介した多賀城碑には、「多賀城」は724年に創建されたと記されています。つまり、あと5年で1300年を迎えるわけです。これに向けて、特別史跡多賀城跡の南門の復元を進め、令和6年には「1300年祭を開催する計画を立てていますが、新しい元号が「令和」に決まったことは、その機運醸成という意味で、大きな後押しになりました。この追い風をうまく生かして、皆で力を合わせて1300年祭の準備を進めたいと思います。

小椋 東近江市にも、素晴らしい歴史や文化が豊富にあります。しかし、あまりにも身近な存在のため、それほど意識を向けない市民も少なくありません。それはもったいないことですよね。だからこそ、まずは小学校レベルから地元を歴史をしっかりと教える。そこから始めるべきでしょう。それが結局は万葉文化の継承にもつながるのだと思います。

高橋 万葉集や和歌などの古典文芸は、一部の愛好家の趣味と捉えられる傾向がありますよね。しかし、私はもっと多くの人にとって日常的なものになればと考えています。

その意味でも子どもたちへの教育、啓発は欠かせません。高岡市でも長年、地元有志が中心となって、「越中万葉かるた」を制作し、市内の小中学校に寄贈する取り組みを進めてきました。また、昭和55年からは「越中万葉かるた大会」も開いています。子どもたちが遊びを通して郷土の歴史に触れることで、誇りや地域への愛着心の形成につながっていくと思います。

仲川 平城京の都があつた奈良市でも、全ての市民が奈良の歴史を把握しているわけではありません。自分が歴史的なまちに住んでいるという意識が希薄な市民も少なくないと思います。しかし、せっかくこのまちを選んで住んでいると感じているわけですから、地域の土地柄に誇りを感じてほしいし、それがシビックプライドにもつながっていくと思います。だからこそ、この地ならではの歴史や文化を広く市民に知っていたくことは大切なことだと思っています。

今後の発掘調査にも期待

菊地 多賀城が5年後に創建から1300年を



平城遷都1300年祭(平成22年)に合わせて復元された、平城京「第一次大極殿」(奈良市)

迎えるということも、当時の碑文が残っているからこそ分かります。その意味では文化財や史跡の存在は重要です。また、発掘調査で、解明された歴史も多々あります。万葉の歌人大伴家持は、陸奥按察使兼鎮守将軍として多賀城に赴任し、この多賀城が終焉の地ともされていますが、残念なことに、多賀城で詠んだとされる家持の歌は残っていません。

今後の発掘調査で、家持の歌や文献などが見つければ世紀の大発見となりますね。

高橋 高岡には万葉集にも歌われた数多くの歌枕があります。地元の人にとっては見慣れた風景ですから、歌の情景も手に取るようにイメージできます。

しかし、その一方で、高岡には当時の出土品がほとんどありません。そこは課題ですから、

将来的には発掘プロジェクトの実施なども考えてみたいですね。

仲川 奈良市の平城宮跡もまだ全体が調査されたわけではありません。発掘で新たな事実が発見されれば、歴史が変わるということも十分にあり得る話ですよ。ただ、歴史は100%の精度で語ることはできません。新たな出土品が発見されても、その読み解きは時代によって変わります。歴史に100%の正解はない。そこにも歴史の奥深さがありますね。

小椋 確かに、現在の歴史は、科学実証主義に偏りすぎているのではないかと印象はありますね。事実そのものも重要ですが、伝説や伝承も同様に大切です。むしろ伝説や伝承に裏打ちされた歴史の方が市民に誇りや居心地の良さをもたらすこともあると思います。

連携を深めて、大きな成果を！

佐々木 万葉集ゆかりのまちという環境を生かして、各都市ではさまざまな取り組みを実施されていますが、同じ条件を持つ都市同士で連携することも大切ではないでしょうか。

高橋 おっしゃる通りです。全国には万葉集ゆ



佐々木 瞳
フリーアナウンサー

かりの自治体も多くありますし、それぞれ万葉集にちなんだまちづくりを展開しています。そうした自治体が一度集まって、意見交換をしたらどうか。そのような思いから、関係自治体に声を掛けさせていただき、平成28年から「全国万葉故地サミット」を始めました。これまで高岡市、多賀城市さんを舞台に開催してきましたが、来年は奈良市さんで開催する予定です。

仲川 蓄積された歴史的資源をどう生かして、未来を創っていくか。これは今の時代を生きる私たちの責任ですよ。同時に、それは独自の存在価値を世界に示すという意味で、国としても重要なことだと思います。

同じゆかりを持ち、志を共有する私たちの地域づくりが、全国に広がる大きなムーブメントとなり、国の戦略やビジョン作りにもつながっていくべきだと思います。

菊地 多賀城市は、東日本大震災直後から、奈良市さんをはじめ、歴史的なつながりを持つ都市に多大なるご支援をいただきました。本当にありがたかったです。多様な連携が復旧・復興を進めていく上で、大きな力となることも実感しました。これからも緩やかにつながり、それぞれが個性を発揮しながら、万葉のまちづくりを進めていきたいですね。

小椋 地域の文化を継承する際に大事なのは若者の力なんです。ムラサキの根を用いたオーガニックコスメを開発したのも若者でしたし、今、東近江には木地師文化発祥の地という特性を踏まえて、林業に目を向ける若者も多くいます。私たちはそうした若者をしつかりと育成するとともに、彼らが活躍できるよう、さまざまな都市とも連携し、ネットワーク化を図ってい

く。これが非常に重要なことではないかと考えています。

佐々木 本日は万葉集を切り口にしながら、地域に根付いた歴史、伝統をいかに後世に継承していくのかということについて、さまざまな視点からご議論いただきました。単に歴史的資源や伝統を守るだけでなく、積極的に活用していくことの大切さがよく分かりました。

今後も市民と力を合わせ、かつ、ゆかりの自治体同士で連携しながら、万葉のまちづくりをさらに活発に推進していただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(令和元年7月10日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。

